

特殊な叩き目を有する製塩土器について

－瀬戸内市師楽遺跡と磯遺跡出土資料を中心に－

田 嶋 正 憲

－ 論 文 要 旨 －

名祖遺跡である師楽遺跡と磯遺跡出土資料の整理から特殊な叩き目を有する製塩土器が見つかった。現在、岡山県域の19遺跡で古墳時代後期の特殊な叩き目の製塩土器が確認されている。その分布は、A：児島西岸域、B：児島東岸域、C：牛窓沿岸域の三域と集落遺跡であり、当該期の塩生産地とリンクしている。しかし、遺跡数はA域（5）とC域（12）に偏在する。また、特殊な叩き目は、9類型が確認できたが、A域に8類型、B域に1類型、C域に8類型とヴァリエーションも偏在する。さらにこの叩き目は、須恵器内面の木製当て具痕と関連しており、各エリアにおける特殊な叩き目の占有比率は、邑久古窯跡群や備中陶古窯跡群からの距離をある程度反映していると考えられた。

製塩土器に須恵器の当て具痕が特殊な叩き目として技術置換し、出現する背景として須恵器製作集団と製塩集団との交流を考えた。具体的には、急激な須恵器需要の拡大に伴う須恵器製作従事者以外の労働力の確保として塩生産集団が再編成されたと推察した。しかもその塩製作集団は、作業閑期（冬季）に安定的に燃料を確保する必要性もあった。

県内の古墳時代後期の製塩土器は、塩生産遺跡、消費地である集落遺跡、製鉄遺跡、須恵器窯跡、古墳で出土している。その立地から塩は、①日常的な消費、②畿内政権への貢納、③古墳への副葬、④祭祀に供されていた。さらに輸送・運搬ルートは、陸上、河川、海上で、運搬物と目的地によって輸送手段が異なった。さらに製塩土器が出土する竪穴住居址群の分析、製塩土器と須恵器の胎土分析、馬形埴輪、舟形木製品、舟形土製品の検討から、①馬、②舟、③人力（徒歩）による輸送手段が想定された。特に県北山間部、内陸部へは、河底や峠道等の状態によって輸送手段が適宜変更された。馬形埴輪、舟形土製品をもつ古墳、製塩土器を副葬する古墳は、輸送網の重要地点に立地するのでその役割は明確である。

また、考古資料（遺構・遺物）に加え、民俗事例や古文書等を繙く必要があること等課題も残った。

キーワード：古墳時代後期、岡山県、特殊叩き目製塩土器、須恵器、技術置換、牧、塩の流通

はじめに

学史の整理と分析方法

我が国における土器製塩の研究は、大正12年(1923)初秋に水原岩太郎が旧児島郡宇野町大字田井字田井浦(現、玉野市田井字田井浦)において手捻りで弥生式土器系統の二種類の土器(無紋の厚手と薄手)を発見し、前者を田井浦甲式土器、後者を田井浦乙式土器と分類したことに始まる。そして昭和4年(1929)1月14日、水原岩太郎が、山本満壽一、山本唯次等の周旋により、旧邑久郡牛窓町字師楽(現、瀬戸内市牛窓町師楽)の山本元三郎所有の畠で試掘を行い、そこから出土した土器を「師楽式土器」と命名した。しかし、水原は、畠に散布する師楽式土器の範囲が比較的広いこと及び最深約3mに達する土器堆積層の間にしばしば灰層等を挟むことから「特殊な窯址」と推察した(水原1939)。その後、昭和18・19年に京都帝国大学考古学教室が高島黒土・王泊遺跡(笠岡市)の発掘調査を行い、炉址等を検出した(坪井1956)。しかし師楽式土器が、製塩土器としてオーソライズされるまでには至らなかった。

昭和28年(1953)1月15日、杉野文一・近藤義郎・岡本明朗・尾崎 庶は、喜兵衛島遺跡(香川県香川郡直島町)の予備調査を実施し、16基の古墳と四つの浜に師楽式土器の包含層を発見した。さらにその包含層中の須恵器片から概ね古墳時代後期の所産と推定した。翌29年3

月24日～4月6日まで第一次発掘、同年8月20日～9月5日まで第二次発掘を主催者や参加者を異にしながら実施した。特に第一次発掘後に岡本明朗によって初めて師楽式土器が製塩のある過程に使用されたとする考えが提出されたことは重要である。そして第二次発掘を経て、最終的に師楽式土器が製塩土器で、さらにその背後の後期古墳群はその集団の人々の墓であると結論づけた(喜兵衛島発掘調査団1956, 近藤1958)。また、調査団の一人であった武田(現姓:間壁)葎子の濃縮鹹水を煎熬するために要する多量の師楽式土器の有効性に関する指摘は炯眼である(武田1955)⁽¹⁾。

一方、昭和34年(1959)夏に東北大学教育学部で西ノ浜遺跡(宮城県松島市)出土の粗製無文土器の調査を行った近藤義郎は、翌35年7月に広畑遺跡(茨城県稲敷市)の発掘調査を行い、土器製塩の起源が縄文時代後期まで遡ることを立証した(近藤1962)。ただ、学史に鑑みて製塩土器という用語は使用していないが、初めて里浜貝塚(宮城県東松島市)出土の尖底土器に注目した角田文衛の仕事も重要である(角田1936)。また、製塩炉址等で検出される通常の土器と粗製無文土器は、同じ製塩土器でも用途の違いによって厳密に区別すべきとの指摘もある(渡辺2012)。さらに、近年、阿部芳郎らによる多角的な研究によって重要な成果があがっている(阿部編2014)。こうした研究の蓄積により縄文時代の土器製塩が関東地方や東北地方等において晩期後半まで継続すること等や縄文社会の実態解明が進みつつある。

現在、東北から九州沖縄まで製塩遺跡が認められるが、弥生時代の最も古い事例は、備讃瀬戸において特に岡山県の児島半島で弥生時代中期後半に出現する遺跡群である(高橋1955・1956・1957, 近藤1966, 間壁1969, 山本1973等)。また、昭和40年代から県内で大規模発掘調査が行われた結果、炉址、作業場、廃棄場等の具体的な遺構が上東遺跡(藤田他1974, 柳瀬他1977)等で確認され始めた。さらに弥生時代製塩土器の編年作業も進んだ(岩本1976)。

その後も深山遺跡(間壁1969)、西江遺跡(田仲他1977)、広江・浜遺跡(間壁他1979)、沖須賀遺跡(福田1981)、阿津走出遺跡(下澤1988)、塩生遺跡(小野1994)等の調査が行われ、古墳時代以降の製塩遺跡の構造(沿岸部と内陸部の流通等)が具体的にになるとともに製塩土器の編年作業も新しい成形技法(叩き技法)の出現と先代からの継承属性である脚台の退化現象に着目した成果が提示された(大山1988, 大久保1992等)。特に従来ほとんど意識されなかった師楽式土器の製作手法を用いた土師器(通常の土師器と同じ器種組成)を「師乐的土師器」として区別し、さらに用語としての師楽式土器は、古墳時代後期に限る等定義した間壁の指摘(間壁1979)は、同時期の他の集落との性格の違いや生産遺跡

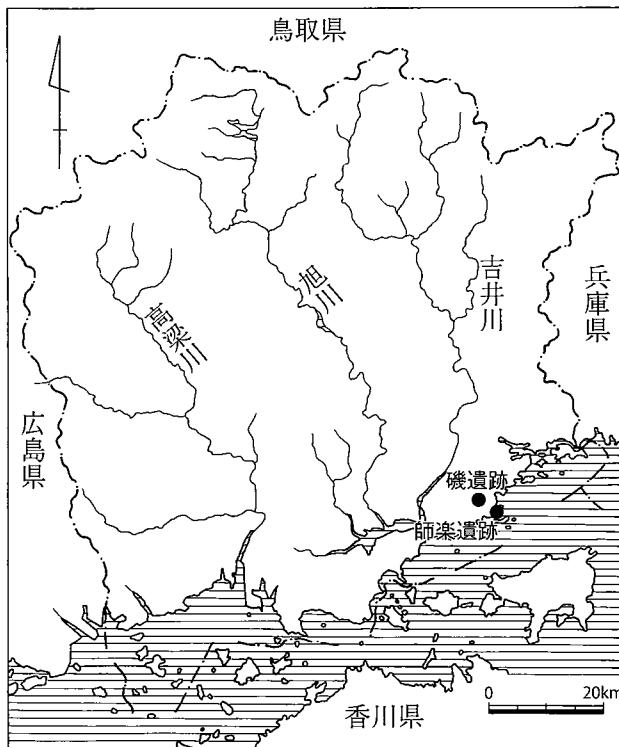


図1 遺跡位置図

とのかかわりを探るうえで大変重要である。さらに近藤義郎らによる製塩遺跡群の全国規模の集成と検討が行われ、同一時間軸における地域性の顕在化等の大きな成果をあげた(近藤1978, 近藤他1980, 近藤編1994)。また、渡辺、森らの製塩遺跡資料を用いて実践した珪藻分析、微細な水洗選別試料分析と製塩実験は、文献に残る製塩作業と当時の生態系の具体的な復元に大きく貢献する実証的データを提供した(森1991, 渡辺1991・2012)。一方、全国的な海の生産用具の集成作業や岡山県域においても喜兵衛島遺跡群の製塩炉址で出土した炭化材の分析や県内の生産地と消費地遺跡出土製塩土器の胎土分析などが実施され(近藤編1999, 白石・田嶋2003, 埋蔵文化財研究集会1986・2007), 製塩遺跡とその関連遺跡群の総合的な研究が進みつつある。

本論では、先ず、御船恭平氏旧蔵の師楽遺跡及び磯遺跡出土の特殊な叩き目⁽²⁾をもつ製塩土器事例について述べ、次に類型化し、県内でのその分布状況を見る。そして同時期の他の生産遺跡及び古墳における製塩土器の出土状況を確認し、特殊な叩き目の出現背景と古墳時代後期における塩の生産と流通についての若干の考察を行う。

1. 師楽遺跡出土の製塩土器

師楽遺跡は、瀬戸内市牛窓町師楽に所在する。錦海湾口の東南部、標高約2mの低台地上に立地する(図1・4)。海水域まで極至近距離にあった。図2の製塩土器は、いずれも底部を欠損するが、丸底状を呈すると推察

される。口縁部形態に若干の相違があり、底部から連続してボール状の内湾口縁のもの(1), 明瞭な肩は形成しないが胴上部から直口ぎみに立ちあがるもの(2・3・5), 内屈するもの(4)がある。

色調は、鈍い橙(7.5YR6/4), 鈍い黄橙(10YR7/4), 浅黄(2.5Y7/3)を呈する。胎土には、0.5mm~1の石英・長石・赤玉を多く含む。器壁は、3~4mmのもの

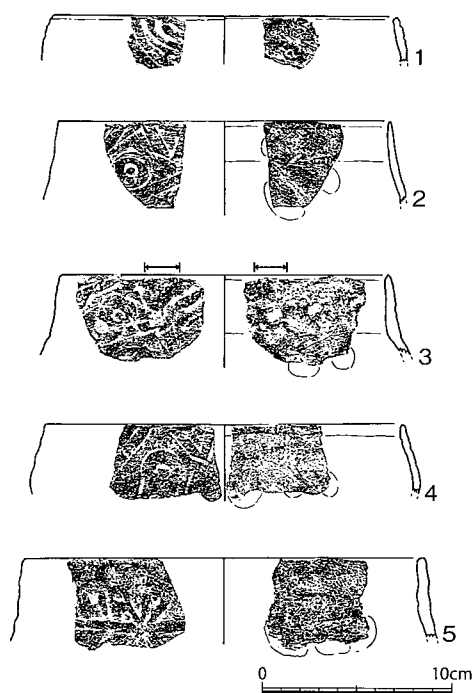


図2 師楽遺跡出土土器 (S=1/4)

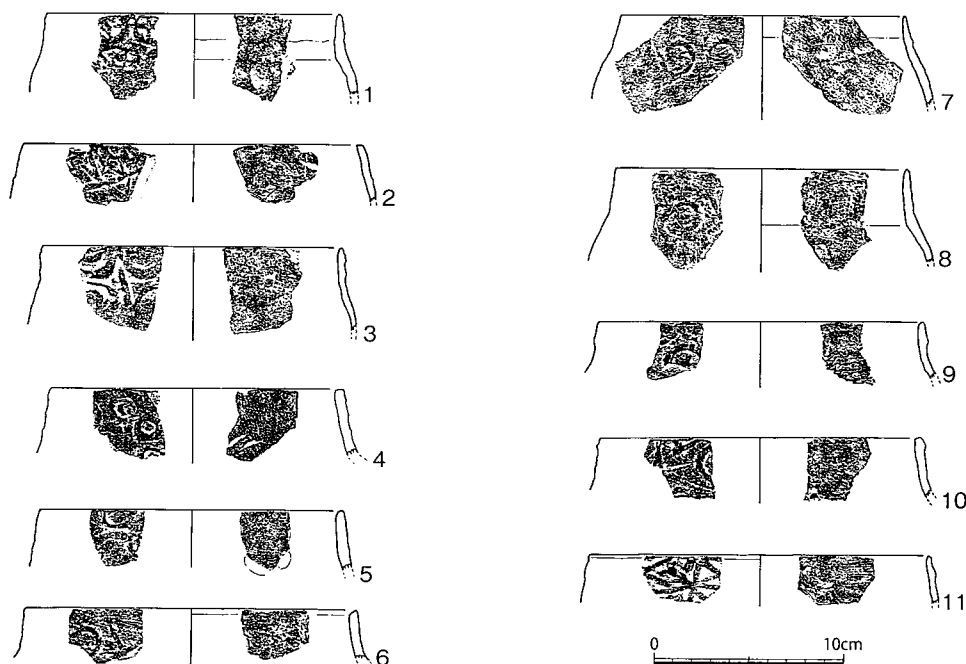


図3 磯遺跡出土土器 (S=1/4)

(1・2・4)と5mm程度のもの(3・5)がある。内面調整は、指頭圧痕が顕著で、そこには指紋が明瞭に観察できる。2には、右手親指の生爪痕と板状工具の擦痕が認められる。4の内面にも生爪痕が認められる。外面調整は、最終的に叩きの前にナデ消されているが、2では叩き目の下に明瞭な二枚貝条痕調整が認められる。3の口唇部には、灰白色物質が付着している(矢印の範囲)。外面の叩き調整をみよう。1には、同心円叩きが施されている。2～5には、同心円とは異なる一重のタイヤ状叩きが認められる。しかも、複数の叩きが併用される特徴がある。ちなみに2は、格子目→タイヤ状→格子目→タイヤ状叩きの順、3は、タイヤ状→格子目→タイヤ状叩きの順、4は、格子目→タイヤ状→格子目叩きの順、5は、矢羽根状→タイヤ状→車輪文叩きの順である。復元口径は、15cm～20cm程度になる。内面には「師楽二」等の墨書注記がある。いずれも焼成は良好である。

2. 磯遺跡出土の製塩土器

磯遺跡は、瀬戸内市牛窓町長浜字磯に所在する。錦海湾奥北西部の旧入り江状部に立地。師楽遺跡からは北西約3kmにある(図1・4)。図3の土器は、図2と同じく底部を欠損するが、同様の丸底を呈すると考えられる。口縁部形態も同様に内湾するもの(11)と明瞭な肩を持たずに短く直口ぎみに立ちあがるもの(1～10)がある。色調、胎土、焼成も師楽遺跡出土土器と同様である。内面調整も指頭圧痕が明瞭でそこには指紋が残っている。4・8の内面には、右手親指の生爪痕が明瞭であ

る。後者には、板状工具の当て痕も認められる。10の内面には二枚貝条痕調整が明瞭に残る。外面調整も叩きの前段階でナデ調整が行われていることは師楽事例と同様である。外面の叩きには、1の車輪文叩き、3の同心円文叩き、2・4のタイヤ状叩き、5～10のタイヤ状より幅が狭い指輪(リング)状叩き、11の小型円形浮文状叩き痕が認められる。また、複数の叩き調整が施されるものがあることも同様である(2・6～11)。2は、リング状叩き→格子目叩きの順、4は、タイヤ状叩きが弧状に施される。5～10は、リング状叩き→格子目叩き→ナデの順、11は格子目叩き→小型円形浮文状叩きの順である。復元口径は、15cm～20cmである。各々の製塩土器内面には、「磯」または「イソ」の墨書注記がある。うち2の内面には「イソ S9.2.17」、5の内面には「イソ 9.2.17」の日付がある。なお、図2・3の土器は、(水原1939)に掲載されている⁽³⁾。

3. 特殊叩き目の類型

現在、管見では岡山県域において19遺跡で特殊な叩き目をもつ製塩土器が出土している(図4・表1)。また、その叩き目は、以下の9類型に整理できた。

【I類】車輪文叩き目(図3-1, 図8-23)。

【II類】同心円叩き目(図2-1, 図3-3, 図8-20～22・24・25, 図9-18・19)。図3-3と図8-22は、類似。

【III類】幅広のタイヤ状叩き目(図2-2～5, 図3-2・4, 図5-13, 図7-1, 図9-21)。

【IV類】幅狭の指輪(リング)状叩き目(図3-5～10, 図5-1・3・5, 図8-11, 図9-20)。

【V類】小型円形浮文状叩き目(図3-11, 図5-10・14, 図9-13～17)。米粒程度のもの(図9-13・14)もある。他の叩き調整と併用されることもある。

【VI類】連弧状叩き目(図8-1・4・26・27)。径が大きいもの(図8-4)と小さいもの(図8-1・26・27)がある。縦位・斜位の平行叩き目と併用事例もある(図8-4・27)。

【VII類】放射状叩き目(図5-9)。

【VIII類】X字状叩き目(図5-8・12・14, 図8-30)。

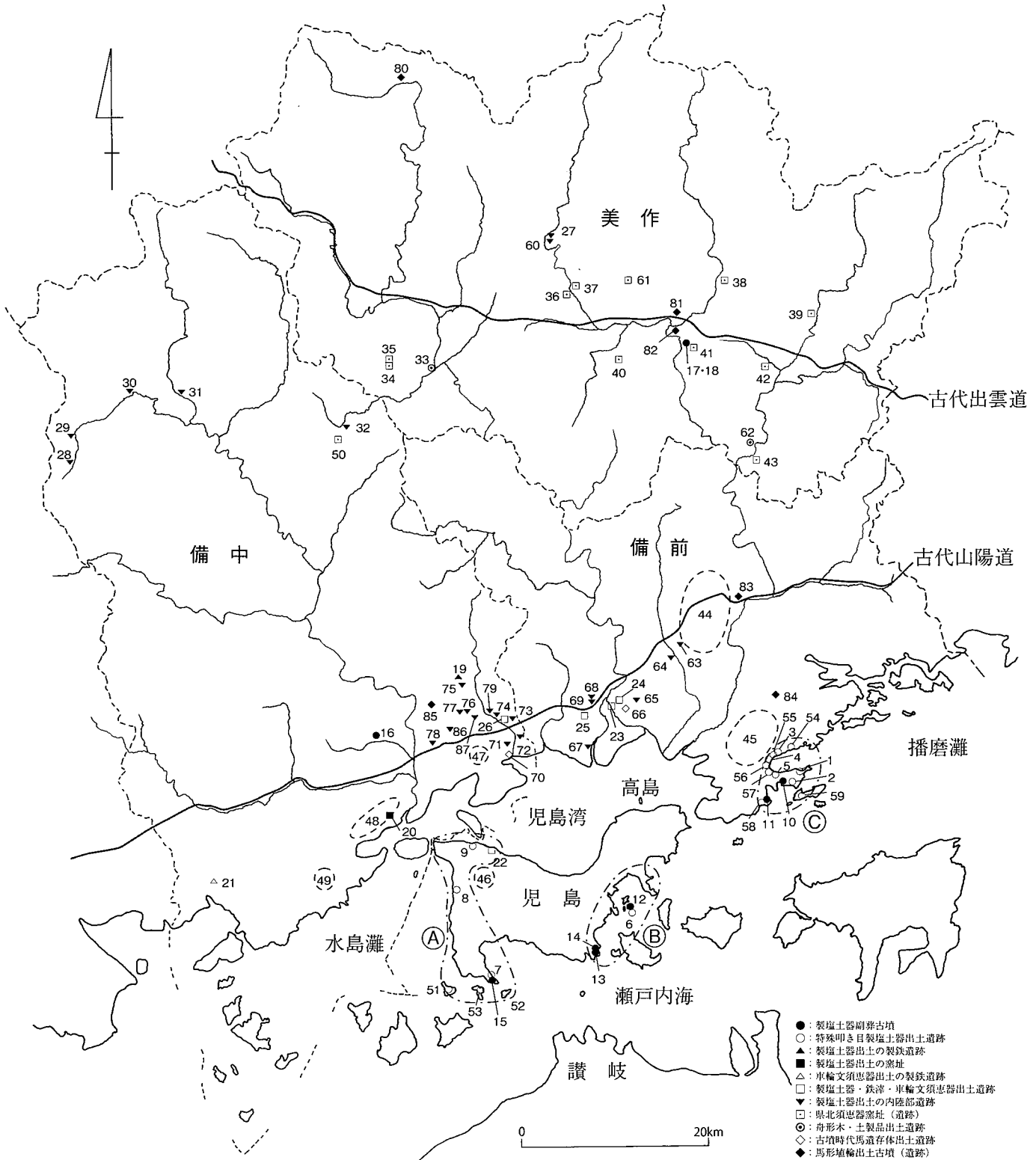
【IX類】IV類とV類が合体したダート状叩き目(図5-11, 図9-2)。

遺跡ごとの状況は表1のとおりである。いずれも当該期の製塩遺跡集中地域(図4-A:19遺跡, B:8遺跡, C:21遺跡)にある。詳しく見るとA域では、5遺跡で8類型, B域では、1遺跡で1類型, C域では、12遺跡で8類型が認められる。なおVI類はA域, VII類はC域のみに見られる類型である。エリア間で明確な相違が認められる。

表1 遺跡別特殊叩き目類型出土状況表

番号	遺跡名	特殊叩き目数量								(A)合計	掲載総数(B)	A/B(%)	群域	文献
		I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類	VIII類					
1	師楽		8	4	37	5		2	1	57	159	35.8	C	水・亀
2	綾浦		1	1					2	4	31	12.9	C	水・亀
3	釜屋ノ上				6	1			1	9	48	18.8	C	水・亀
4	磯	5	1	2	15	5			7	35	180	19.4	C	水・亀
5	大適口				2	1		1	1	5	43	11.6	C	水・亀
6	喜兵衛島南東浜			1						1	295	0.34	B	近
7	阿津走出	1	18		1		6		1	27	123	22	A	下
8	広江・浜								3	3	268	1.1	A	間
9	舟津原貝塚		2	1	1	5				9	38	23.7	A	藤
51	六口島大首				2					2	51	3.9	A	水
52	釜島北・東浜					1				1	26	3.8	A	水
53	檜石島甲浦浜								1	1	54	1.9	A	水
54	尻海西浜								1	1	25	4	C	水
55	殿畑				1	2				3	38	7.9	C	水
56	安長				4				1	5	54	9.3	C	水
57	北田					4				4	15	26.7	C	水
58	矢寄				1				3	4	37	10.8	C	水
59	前島尾越		1	1	2					4	19	21.1	C	水
26	津寺		1							1	13	7.7	-	光・中・岡

※水:水原1939, 亀:亀田編1997, 近:近藤編1999, 下:下澤1988, 間:間壁他1979, 藤:藤田1981, 光:光永他1995, 中:中野他1998, 岡:岡本他1999。
番号と群域は図4に対応。



1. 師楽遺跡 2. 綾浦遺跡 3. 釜屋ノ上遺跡 4. 磯遺跡 5. 大道口遺跡 6. 喜兵衛島南東浜遺跡 7. 阿津走出遺跡 8. 広江・浜遺跡 9. 舟津原貝塚 10. 乙佐塚古墳
11. 榎ヶ谷1号墳 12. 喜兵衛島古墳群（2・5・6・8・13・16号） 13. 地蔵山1号墳 14. 地蔵山2号墳 15. 琴海1号墳 16. 八絃8号墳 17. 小原遺跡A地点1号墳
18. 小原遺跡A地点2号墳 19. 千引カナクろ谷製鉄遺跡 20. 寒田4号窯址 21. 鍛冶屋遺跡 22. 左古谷遺跡B地点 23. 百間川原尾島遺跡 24. 原尾島遺跡 25. 伊福定国前遺跡
26. 津寺遺跡 27. 夏栗遺跡 28. 大倉遺跡 29. 西江遺跡 30. 新市谷遺跡 31. 宗金遺跡 32. 谷尻遺跡 33. 下市瀬遺跡（平安） 34. 橋谷窯址（奈良） 35. ズリ窯址（奈良）
36. 広瀬古窯址 37. 牛の子窯址 38. 名称未定窯址 39. 豊久田窯址（奈良） 40. 小屋谷窯址 41. 柳谷窯址 42. 宇津木谷窯址 43. 天神岩生谷窯址（奈良） 44. 磐祭古窯跡群
45. 邑久古窯跡群 46. 児島古窯跡群 47. 江田池・御堂奥・末の奥古窯跡群 48. 備中陶古窯跡群 49. 金光須恵古窯跡群 50. 小殿池遺跡 51. 六口島大首遺跡
52. 釜島北の浜・東の浜遺跡 53. 櫃石島甲浦浜遺跡 54. 尻海西浜遺跡 55. 殿畑遺跡 56. 安長遺跡 57. 北田遺跡 58. 矢寄遺跡 59. 前島尾越遺跡 60. 久田原遺跡 61. 一宮窯跡
62. 月の輪古墳（中期） 63. 富富遺跡 64. 着銅遺跡 65. 赤田東遺跡 66. 百間川今谷遺跡 67. 鹿田遺跡 68. 津島岡大遺跡 69. 津島遺跡 70. 上東遺跡 71. 矢部堀越遺跡
72. 吉野口遺跡 73. 加茂政所遺跡 74. 三手向原遺跡 75. 林崎遺跡 76. 窪木遺跡 77. 南溝手遺跡 78. 真壁・荒神市遺跡 79. 高塚遺跡 80. 四ツ塚13号墳 81. 六ツ塚1号墳
82. 日上畝山59・69号墳 83. 円光寺遺跡 84. 大塚埴1号墳 85. すりばら池2号墳 86. 三須畠田遺跡 87. 窪木薬師遺跡

図4 古墳時代後期の関連遺跡分布図

4. 古墳出土の製塩土器

現在、岡山県域では8遺跡14古墳から副葬・供献品と考えられる製塩土器が出土している(図4)。以下、概観する。

(1) 小原遺跡A地点1号墳

直径約9mの円墳。製塩土器は、第2主体部から須恵器杯蓋、鉄製鋤先・刀子、土師器とともに出土した(図

9-33~35)。第1主体部箱式石棺の枕転用須恵器杯蓋とセットになる。須恵器はTK47型式。時期は6世紀初頭(行田他1991)。

(2) 小原遺跡A地点2号墳

1号墳から約5m南西に位置する直径7.6mの円墳。製塩土器は、第3主体部の土壙墓より出土(図9-36~38)。1号墳より若干新しい(行田他1991)。

(3) 喜兵衛島13号墳

直径約9mの円墳。竪穴式石室。製塩土器は、石室床

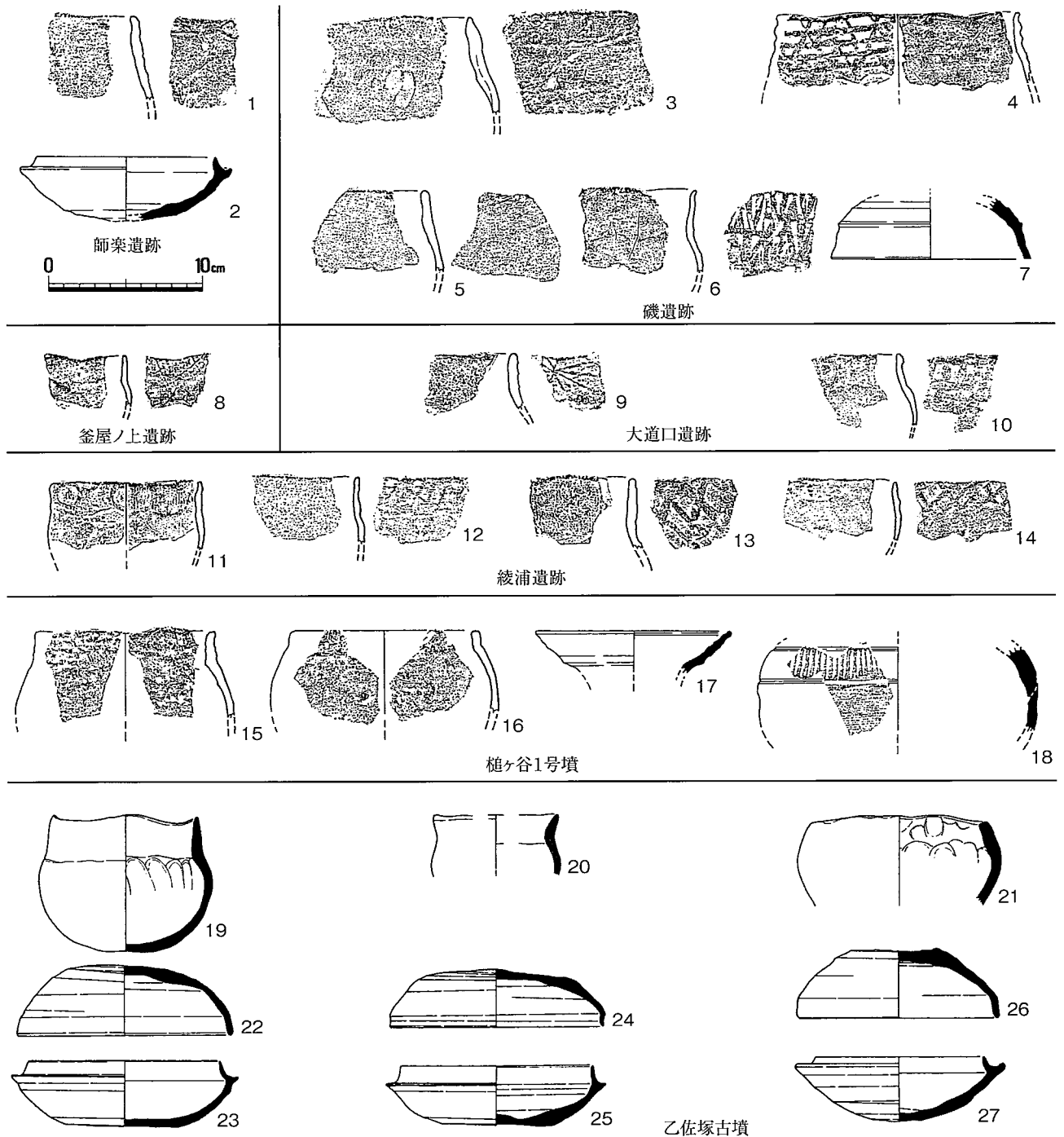


図5 Cエリア出土の製塩土器・須恵器 (S=1/4)

面より大形鍬鉄製品，鉄製斧・鎌・刀子・釣針，須恵器，土製練玉，ガラス玉と供出土（図7-5～7）。須恵器は，MT15型式。6世紀前半頃（近藤編1999）。

(4) 喜兵衛島2号墳

直径約8m，高さ約2.5mの円墳。両袖式横穴式石室。無文指頭圧痕の製塩土器は，須恵器，土師器，鉄製斧・鎌・鍬（多量）・鉾・刀子，砥石，耳環，鉄滓とともに出土した（図7-8～10）。須恵器はTK10型式。6世紀中頃（近藤編1999）。

(5) 喜兵衛島6号墳

径約10mの円墳。右袖型横穴式石室。製塩土器は，石室床面より須恵器，土師器，鉄製鍬・刀子・槍鉋・刀，耳環，土製練玉，ガラス玉とともに出土（図7-11～16）。須恵器は，TK43～209型式。6世紀後半（近藤編1999）。

(6) 喜兵衛島16号墳

推定径約10mの円墳。右片袖式横穴式石室。製塩土器は，玄室床面からやや高位で須恵器，土師器，鉄製鍬・刀子等とともに出土（図7-17～19）。須恵器は，TK209型式。6世紀末（近藤編1999）。

(7) 喜兵衛島5号墳

推定径約10mの円墳。右袖型横穴式石室。無文指頭圧痕の製塩土器は，玄室南半床面で須恵器，土師器，鉄片及び北半の須恵器，土師器，鉄器，金・銀環とともに出土（図7-20～27）。須恵器は，TK217型式。7世紀前葉（近藤編1999）。

(8) 喜兵衛島8号墳

推定円墳。無袖式横穴式石室。無文指頭圧痕の製塩土器は，石室内より須恵器，土師器，鉄製刀・鍬・刀子，耳環，琥珀製棗玉等とともに出土（図7-28～32）。須恵器は，TK217型式。7世紀前葉（近藤編1999）。

(9) 乙佐塚古墳

径約10mの円墳。左片袖式横穴式石室。指頭圧痕の製

塩土器は，石室床面より高位で須恵器，鉄製鎌・刀子・鍬・帯金具，耳環，紡錘車，棗玉とともに出土（図5-19～27）。須恵器はTK43～217型式。邑久古窯址群と関連（岡本1986）。

(10) 槌ヶ谷1号墳

径約23mの円墳。右片袖型横穴式石室。製塩土器は，須恵器，土師器，鉄製鍬・鉾・小札・用途不明品，鉄滓とともに採集。6世紀後半～7世紀前半と推定（亀田編1997）。

(11) 地藏山1号墳

径約12mの歪な円墳。無袖横穴式石室。製塩土器は，須恵器，土師器，鉄鍬・釘，耳環とともに石室内より出土（図6-1～9）。須恵器は，TK43～209型式。6世紀後半～7世紀初頭（寶蔵1992）。

(12) 地藏山2号墳

推定円墳（消滅）。横穴式石室。製塩土器は，須恵器，土師器とともに出土。須恵器の時期は，1号墳より若干古い（寶蔵1992）。

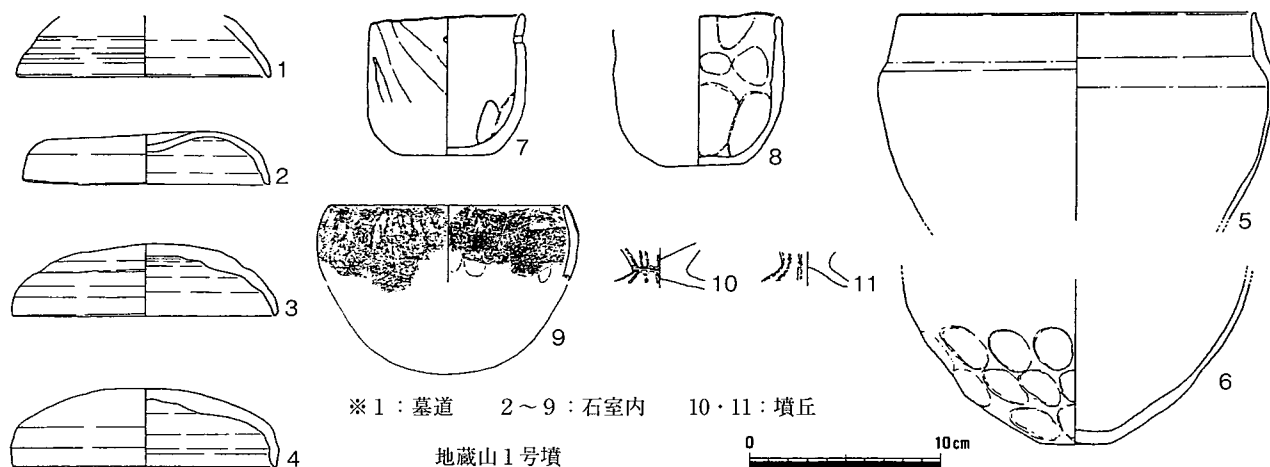
(13) 琴海1号墳

直径約12mの円墳。無袖型横穴式石室。製塩土器は，須恵器，土師器，師樂的土師器，鉄製武器・釘・鉾，金銅製鞘金具・耳環等，土玉，ガラス玉とともに出土（図10-1～11）。追葬有。須恵器は，TK209～217型式。6世紀末～7世紀前半（山磨他1980）。

(14) 八紘8号墳

推定径6～7mの小型円墳。横穴式石室（袖不明）。製塩土器は，イモ穴から須恵器とともに，敷石床から須恵器，鉄鍬が出土（図10-12～14）。須恵器はTK209型式。6世紀末（物部編2011）。

図4A～Cの塩製産遺跡群に近接する臨海性古墳からの出土が目立つが，内陸部の古墳出土事例もあり，立地的に注目される。



※1：墓道 2～9：石室内 10・11：墳丘

地藏山1号墳

図6 Bエリア出土の製塩土器・須恵器1 (S=1/4)

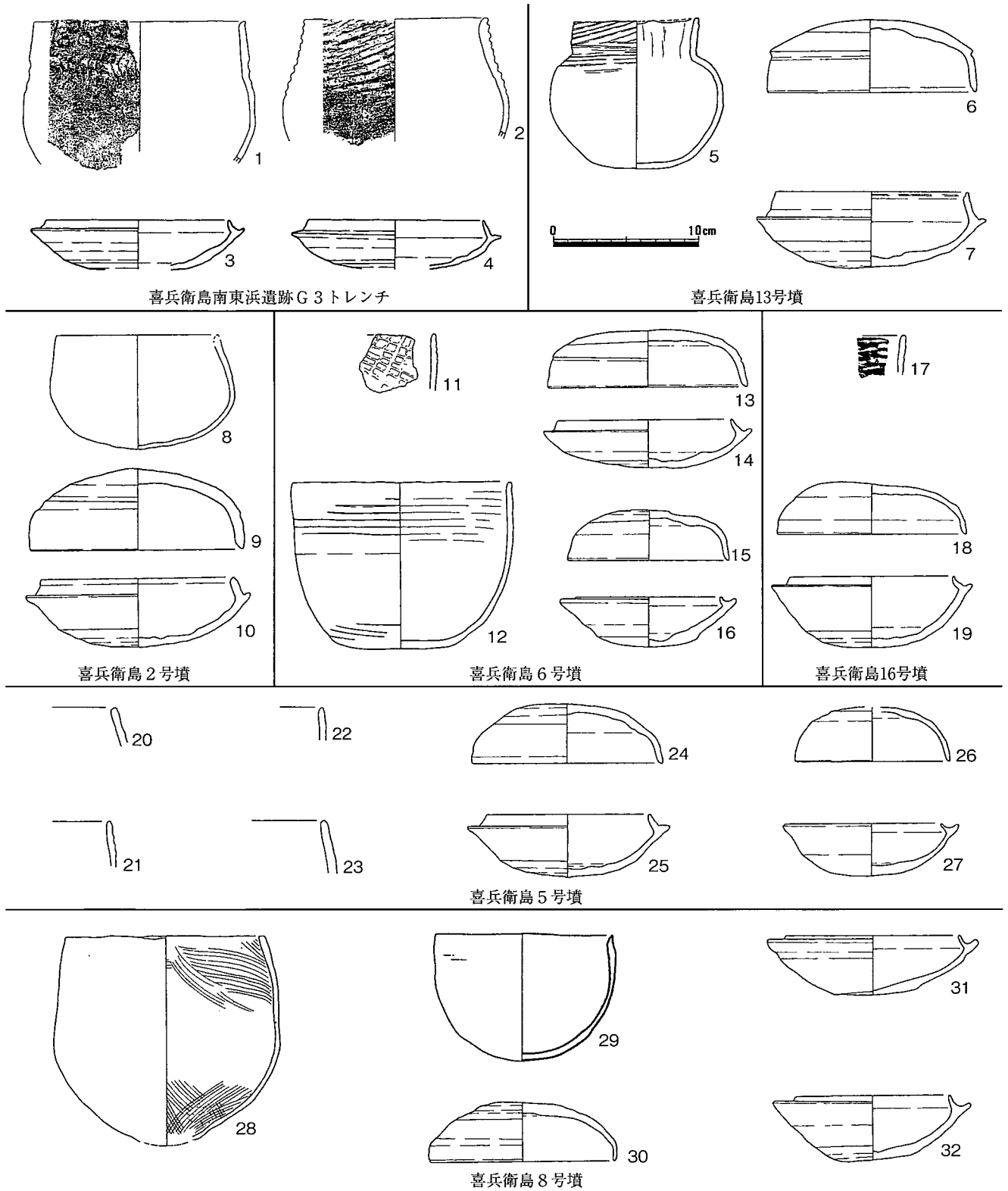
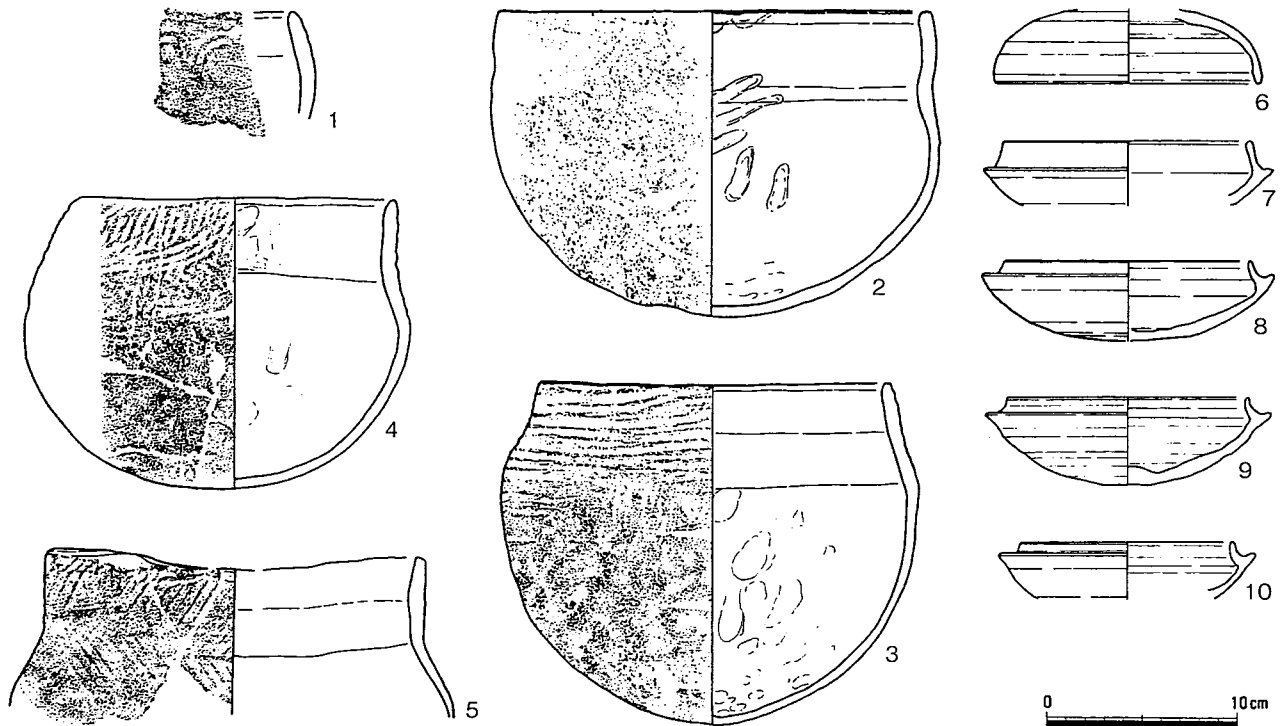
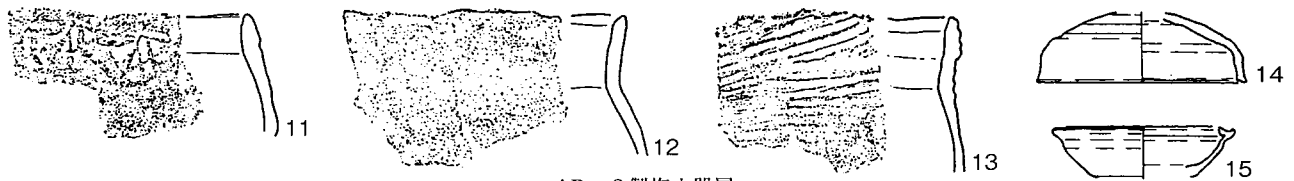


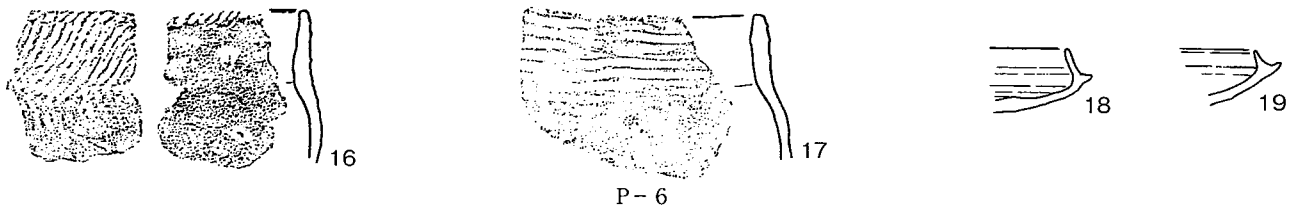
図7 Bエリア出土の製塩土器・須恵器2 (S=1/4)



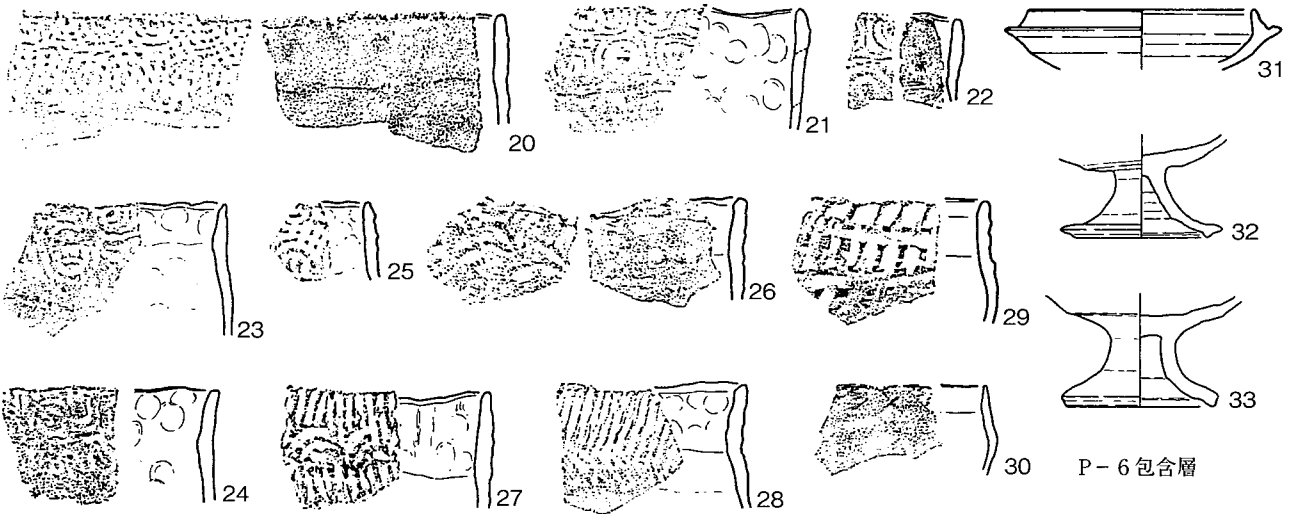
竪穴住居址 1 覆土



AR-2 製塩土器層



P-6



1~33: 阿津走出遺跡

P-6 包含層

図8 Aエリア出土の製塩土器・須恵器 1 (S=1/4)

8. まとめ

古墳時代後期の製塩土器に見られる特殊な叩き目は、現在19遺跡で確認されている。また、通常の叩き目と併用される場合もあるが、特殊叩き目には9類型が確認できた(表1)。出土遺跡は、県南部の三つの塩生産地に集中するが、内陸部集落遺跡からの出土も一例ある。特に図4のA域とC域の塩生産地に遺跡が集中し、大まかではあるがその出現頻度もB域よりも高くなる。このことは、特殊な叩き目が、須恵器製作技術の一つで、叩き成形作業に使用される木製当て具痕に起因していることと相関し、即ち6世紀後半に操業を開始する県下第2位の規模の備中陶古窯跡群(図4-48)、6世紀前半に操業を開始していた県下最大規模の邑久古窯址群(図4-45)各々からの距離を反映していると推察される。この点、美作域の須恵器窯の散在的な存在形態とは明確に異なる(図4)。では、なぜ須恵器内面の当て具痕が製塩土器に技術置換して出現するのだろうか。現時点で筆者は、塩生産の閑期(冬季)に安定的な燃料確保を目的として製塩集団が須恵器製作に一定期間労働力を提供した結果、作業行為や専門知識等を直接見聞きする機会に遭遇した間接的な場合と逆に末端の須恵器製作従事者が須恵器製作の閑期(春・夏)に製塩集団に労働力を提供し、それら須恵器製作技術・作業動作を直接的に製塩土器製作に実行した場合に起こり得る現象ではないかと考えている。実際に製塩土器に見られる結果として残された叩き痕(当て具痕)の二者(写真と模倣)は、示唆的である。つまり、大きな背景として各郡域相当の在地首長層が日常的に使用する須恵器の急激な需要増加に伴い、従来の須恵器製作従事者以外の労働力を確保する必要性が生じたため地域社会変動が促進されたと考えるのである。

一方、住居址から製塩土器が出土する遺跡群は、特徴的なあり方を指摘できる。即ち特定集落内の限定エリアに存在する竪穴住居址に集中するのである(図4・表2)。具体的には、備前域では、旭川東岸の百間川原尾島遺跡(図4-23)と原尾島遺跡(図4-24)、備中域では、高梁川東岸の三須島田遺跡(図4-86)、足守川西岸支流の窪木遺跡(図4-76)、足守川東岸の津寺遺跡(図4-26)、高塚遺跡(図4-79)に集中する。表2に見られる古墳時代後期の備前・備中南部における製塩土器を保有する住居址の時期的な差異は、在地勢力が集落近辺に前方後円墳を築造してきたか否か等、つまり畿内政権の相対的な影響度も背景にあると考えられる。また、表2の特定集落が集中する立地も重要である。すなわち、いずれも古代山陽道に近い位置に集落が集住化しているのである。特に備中域の津寺遺跡、高塚遺跡は有

力な在地勢力であるこうもり塚古墳、江崎古墳等と有機的な関係にあり、さらに備中陶古窯跡群等(図4-47・48)も配下にあったと推察される。また、製塩土器と須恵器の胎土分析から特定の塩生産遺跡群(図4-A)にある左古谷遺跡(図4-22, 田嶋2001)及び阿津走出遺跡(図4-7, 下澤1988)から津寺遺跡高田調査区の竪穴住居址群(集落)へダイレクトに塩がもたらされていることが確認されたことにより、特定の塩生産遺跡群と特定集落が強く結びついている蓋然性が高まった(白石・田嶋2003)。さらに唯一の集落遺跡事例である津寺遺跡高田調査区住居7から出土している特殊叩き目Ⅱ類製塩土器(図10-15, 岡本編1999)は、極めて示唆的である。

では、なぜ津寺遺跡等の特定集落は、塩を必要としたのだろうか。以下にその可能性を述べる。表2の特定集落の遺跡立地をみるとのちの古代山陽道の前身となる機能を有した古墳時代後期の「道」の存在が推察される(図4)。また、一般的に古代史では在地首長層に対する国造制、ミヤケ制、部民制等によるヤマト政権への身分的隷属化は、6世紀には完成していたとされている(狩野1970)。したがって、吉備地方の特産品(例えば本論で取り上げた塩)等の貢納及びその輸送に供する道路網の存在は、想像に難くない。その際に使用された新たな輸送装置が馬であったと考えられる。つまり、のちの古代律令国家による駅家制・伝馬制の前身にあたる機能を有した施設が幹線道に隣接する古墳時代後期の津寺遺跡や高塚遺跡等の特定集落にあり、そこで飼養している馬の餌である藁等に塩をまぜて計画的に与えながら施設を円滑に運営するために特定の塩生産地から安定的に供給を受ける必要があったと考えるのである。ところが、実際は全国的に見ても河内平野の四条畷市にある部屋北遺跡(大阪府教育委員会2010)等一部の遺跡を除くと具体的な「牧」関連遺構の検出は皆無なのである。しかし、一般的には、馬具の古墳への副葬が5世紀初頭に始まり、乗馬用馬具の登場とともに馬自体も朝鮮半島から持ち込まれ(小野山1990)、さらに5世紀末以降は、馬具の普及に見られるように馬の繁殖も広まり広く普及する。また、馬形埴輪の出現と普及も地域によって若干の時間差はあるもののほぼ軌を一にした様相を呈するようである(宮崎2012)。

ここで県内での事例を見よう。注目されるのは、全国的に見ても貴重な事例となる上東遺跡(図4-70)と百間川今谷遺跡(図4-66)の馬遺存体である。両者とも古墳時代に属し、特に後者は5世紀中葉から6世紀前葉に帰属する。推定体高は、130cmで在来中型馬のやや小型に相当し、中世馬よりやや大きい特徴がある(富岡2009)。また、松井は、詳細な時期は不明としながらも古墳時代中期を遡る可能性がある馬遺存体事例が吉備地

方に比較的多くみられることから他の地域より早く馬が出現する畿内地域とともに注目していた（松井1990）。一方、間接的に馬の存在を示す資料の一つである馬形埴輪は、県内の7遺跡で確認されている。即ち旭川上流部北岸に位置する蒜山四つ塚13号墳、馬具も保有（図4-80、近藤1954）、吉井川上流部の分岐点、津山盆地への入り口である加茂川を俯瞰する丘陵に相對峙して、北側に位置する六ツ塚1号墳（図4-81、河本1986、小郷他2007）、南側に位置する日上畝山59号・69号墳（図4-82、小郷他2007）、吉井川中流域の分岐点と支流の小野田川に挟まれた円光山裾の高台にある円光寺遺跡（図4-83、鎌木1956）、千町川上流部に近接した独立丘陵にある大塚峠1号墳（図4-84、杉山1998）、東流高梁川北岸の丘陵上にあるすりばち池2号墳（図4-85、高田編1993）である。いずれも河川あるいは当時の幹線道に近接した古墳（遺跡）から出土しており、河川における湊（津）としての機能を有した集落を近辺に形成していたものと推定される。いずれの事例も6世紀初頭から前中葉であり、全国的な馬の拡散時期と軌を一にしている点でも注目される。

また、一般的に5世紀には舟による輸送も古墳時代前期以上に本格化したと言われている（一瀬2012）。しかし、舟に関する県内での完形事例は少なく、吉井川が吉野川と分岐した北岸の標高約320mの大平山山頂に築かれた月の輪古墳（図4-62）の造出し部から出土した5世紀前半の舟形土製品があるのみで、そのプロポーションは舳と艫が高く反りがあがっているようで丸木舟とは明らかに構造が異なる（近藤編1960）。また、時期は若干新しく平安時代ではあるが、河内川が分流した旭川西岸の標高約125mの氾濫原にある下市瀬遺跡の井戸I付近から舟形木製品が5点出土しており、川舟を忠実に模しているようである（図4-33、新東他1973）。また、江戸時代中頃までは、下市瀬地区が高瀬舟の船着場であったが、中頃以降は下流の垂水地区に移ったという（新東他1973）。一方、直接的に舟を示す遺物ではないが、造山古墳群中の榊山古墳から出土した遺物、千足古墳に採用された出現期横穴式石室である肥後型堅穴系横口式石室と肥後産砂岩製石障等に見るまでもなく、造山古墳の出現は、その前方後円墳の規模から当時、地方の在地首長層で畿内の大王級と遜色なかったことを具現化しており、軍事化が促進される中、国内外の交渉事も造山古墳主導で比較的独自に実施可能であったと考えられ、それら物資の運搬・輸送は、物理的に陸上交通では難しいものもあるため海上輸送の頻度は高かったと推察される（島崎1982、岡山市教育委員会2014、西田編2015）。

岡山県内の製塩土器は、塩生産遺跡、消費地である集落遺跡、製鉄遺跡、須恵器窯跡、古墳で出土している。特に遺跡（古墳）の立地に注目してみると塩は、①日常

的な消費、②畿内政権への貢納、③古墳への副葬、④祭祀に供されていたと考えられた。また、その輸送・運搬ルートは、陸上、河川、海上があり、運搬物と搬送先によって輸送手段が異なると考えられた。さらに製塩土器が出土する堅穴住居址群の分析、製塩土器と須恵器の胎土分析、馬形埴輪、舟形木製品、舟形土製品の検討から、①馬、②舟、③人力（徒歩）による輸送手段が想定された。特に県北山間部、内陸部への輸送は、河底や峠道等の状態によって輸送手段が適宜変更されたと考えられる。馬形埴輪、舟形土製品をもつ古墳、製塩土器を副葬する古墳は、輸送網の重要地点に立地するのでその役割は明確である。

古墳時代後期の吉備の特産品の一つである塩について特殊な叩き目の製塩土器をヒントに考えた結果、この遺物の分析から得られる情報は大きいことが再確認できた。ただ、やや助長した内容となったこと、民俗事例と古文書の分析不足、塩生産地（図4-C）と集落の関係が若干不明なこと等が残るが、この点は次回への課題としたい。

このたび白石先生が還暦を迎えられました。先生との最初の共同研究テーマは、想い出深い須恵器と製塩土器でした。今後の益々のご多幸とご健勝を祈念いたします。

謝 辞

本稿をなすにあたり次の皆様、機関にご教示を賜るとともに文献提供と実測の便宜を図っていただいた。末筆ではあるが、厚くお礼申し上げる（五十音順、敬称略）。井上宗男 上西節雄 小野雅明 亀田修一 神原英朗 徳澤啓一 間壁忠彦 間壁霞子 宮本真二 三吉秀充 倉敷埋蔵文化財センター 玉野市教育委員会

注

- (1) 後年、間壁は、師楽式土器が、煎熬土器である以前に海水濃縮のための蒸発用容器でもあるという見解に至るのである（間壁2000）。
- (2) 当該期（6～7世紀）によく見られる叩き目は、直線基調叩きである平行（横位・縦位・斜位）、格子目、矢羽根等であるが、本論では特殊とは便宜上それらを除く曲線基調、交差基調（×字状）叩きを指す。
- (3) 間壁忠彦によれば、形見分けとして水原から御船に渡されたものだろうとのことであった。この点について、筆者も少し纏めている（田嶋2016）。

参考・引用文献

- 阿部芳郎編2014『縄文の資源利用と社会』季刊考古学別冊21 雄山閣
一瀬和夫2012「3 交通と伝達 ②船・ソリ」『古墳時代の考古学』5. 時代を支えた生産と技術 同成社 192-203頁

- 岩本正二1976「弥生時代の土器製塩」『考古学研究』第23巻第1号
考古学研究会 87-103頁
- 大久保徹也1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』
(下) 山陽新聞社 207-246頁
- 大阪府教育委員会2010『葦屋北遺跡Ⅰ』大阪府埋蔵文化財調査報告
第2009-3
- 大山真充・真鍋昌宏編1998『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査
報告Ⅴ大浦浜遺跡』香川県教育委員会
- 岡本寛久1986『乙佐塚古墳発掘調査報告書』乙佐塚古墳埋蔵文化
財発掘調査委員会
- 岡本寛久編1999『津寺遺跡6-立田排水機場ならびに立田排水機
場関連放水管地下埋設事業に伴う発掘調査-』岡山県埋蔵文化
財発掘調査報告143 岡山県教育委員会 149-213頁
- 岡山市教育委員会2014『史跡造山古墳 第一、二、三、四、五、六古墳
保存管理計画書』
- 小郷利幸・豊島雪絵・行田裕美・白石 純2007『日上畝山古墳群
Ⅱ-範囲確認調査報告書-』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第
78集 津山市教育委員会
- 小野雅明1994「塩生遺跡発掘調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター
年報1-1993年度-』倉敷埋蔵文化財センター 18-20頁
- 小野山 節1990「古墳時代の馬具」『日本馬具大観』1 古代上
日本中央競馬会 1-32頁
- 狩野 久1970「部民制-名代・子代を中心として-」歴史学研
究会・日本史研究会編『講座日本史』1 古代国家 東京大学出
版会 121-147頁
- 鎌木義昌1956「人物埴輪を出土する備前、円光寺遺跡」『考古学雑
誌』第41巻第4号 日本考古学会 311-314頁
- 亀田修一編1997「Ⅱ 古墳時代」『牛窓町史』資料編Ⅱ 牛窓町
129-288頁
- 喜兵衛島発掘調査団1956「謎の師楽式-瀬戸内海喜兵衛島の考古
学的調査報告-」歴史科学協議会編『歴史評論』72 1-42頁
- 河本 清1986「150. 六ツ塚古墳群」『岡山県史』第18巻 考古資
料 岡山県 308-311頁
- 近藤義郎1954『蒜山原-その考古学的調査- 第1回』蒜山原観
光協会
- 近藤義郎1958「師楽式遺跡における古代鹽生産の立證」歴史学研
究会編『歴史学研究』9 (No.223) 岩波書店 1-12頁
- 近藤義郎1962「縄文時代における土器製塩の研究」『岡山大学法文
学部学術紀要』第15号 岡山大学法文学部 1-19頁
- 近藤義郎1966「製塩」近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学』Ⅴ
古墳時代(下) 河出書房新社 46-56頁
- 近藤義郎1978『日本塩業体系 史料編 考古』日本専売公社
- 近藤義郎・渡辺則文1980「原始・古代」『日本塩業体系』原始・古
代・中世(稿) 日本専売公社 3-100頁
- 近藤義郎編1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 近藤義郎編1994『日本土器製塩研究』青木書店
- 近藤義郎編1999『喜兵衛島-師楽式土器製塩遺跡群の研究-』喜
兵衛島刊行会
- 島崎 東1982「備中神山古墳採集遺物について」『岡山県史研究』
第3号 岡山県 96-104頁
- 下澤公明1988「阿津走出遺跡」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に
伴う発掘調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 岡山県教
育委員会
- 白石 純・田嶋正憲2003「県南における製塩土器・須恵器の胎土
分析」『岡山市埋蔵文化財センター年報2-2001(平成13)年
度-』岡山市教育委員会 42-49頁
- 新東晃一・田中満雄1973「2 下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建
設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3) 岡
山県教育委員会 81-146頁
- 杉山一雄1998「大塚峠1号墳」『長船町史』資料編(上) 考古古代
中世 長船町 152-153頁
- 高田明人編1993『すりばち池古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査
報告13 総社市教育委員会
- 高橋 護1955「郷内村小學校裏貝塚出土彌生式土器の編年の位置
について」『遺跡』第23号 瀬戸内考古学会 1-5頁
- 高橋 護1956「台付鉢形土器の系譜」『遺跡』第25号 倉敷考古館
研究部 5-11頁
- 高橋 護1957「戸津田遺跡出土の弥生式土器」『遺跡』第26号 倉
敷考古館研究部 11-22頁
- 武田恭彰1999「第三章 千引遺跡 第15節 千引カナクロ谷製鉄
遺跡」『奥坂遺跡群-鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査-』
総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 総社市教育委員会 127-162
頁
- 武田茂子1955「師楽式土器及びその文化について」『遺跡』第22号
(1954年度卒業生特集) 岡山県学生考古学会 5-13頁
- 田嶋正憲2001『左古谷遺跡』灘崎町埋蔵文化財発掘調査報告1
岡山県灘崎町教育委員会
- 田嶋正憲2003「古墳時代後期の生産と流通-小地域間交易の一
例-」『山口大学考古学論集-近藤喬一先生退官記念論文集-』
山口大学考古学研究室 181-194頁
- 田嶋正憲2016「吉備考古館所蔵の彦崎貝塚出土縄文中期東日本系
土器-岡山県縄文時代遺跡調査今昔-」『岡山市埋蔵文化財セン
ター研究紀要』第8号 岡山市教育委員会 1-20頁
- 田仲満雄・正岡睦夫・二宮治夫1977「西江遺跡(58)」『中国縦貫
自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報
告(20) 岡山県教育委員会 173-462頁
- 角田文衛1936「陸前里浜貝塚の尖底土器」『史前学雑誌』第8巻5
号 史前学研究会 17-26頁
- 坪井清足1956『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』岡山縣高島遺蹟
調査委員会
- 富岡直人2009「付載3 百間川今谷遺跡出土動物遺存体の分析」
『百間川今谷遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告217 岡山
県教育委員会 211-216頁
- 中野雅美編1997『津寺遺跡4-山陽自動車道建設に伴う発掘調査
14-』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 岡山県教育委員会
- 西田和浩編2015『千足古墳-第1~第4次発掘調査報告書-』岡
山市教育委員会
- 福田正継1981『沖須賀遺跡-玉野市立山田中学校校舎改築工事に
伴う発掘調査-』玉野市埋蔵文化財発掘調査報告(2) 玉野市
教育委員会

藤田憲司・柳瀬昭彦1974「第三部 上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 岡山県教育委員会 97-235頁

藤田憲司1981「倉敷市舟津原貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第16号 倉敷考古館 11-20頁

藤原好二・鍵谷守秀・小野雅明2003『寒田窯址群4号』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第10集 倉敷埋蔵文化財センター

寶藏光辰1992『地藏山1号墳』玉野市埋蔵文化財発掘調査報告(5) 玉野市教育委員会

埋蔵文化財研究集会1986『海の生産用具－弥生時代から平安時代まで－』第19回埋蔵文化財研究集会

埋蔵文化財研究集会2007『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』第56回埋蔵文化財研究集会

間壁忠彦1969「玉野市田井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号 倉敷考古館 54-63頁

間壁忠彦1970「玉野市内の石器時代～古墳時代遺跡」『玉野市史』玉野市 62-66頁

間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司・小野一臣1979「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 倉敷考古館 1-203頁

間壁霞子1969「児島・上之町保育園内遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号 倉敷考古館 38-53頁

間壁霞子1979「Ⅵ章 製塩土器についての一、二の問題」『倉敷考古館研究集報』第14号 倉敷考古館 197-201頁

間壁霞子2000「師楽式土器再考」『神女大史学』第17号 神戸女子大史学会 1-30頁

松井 章1990「動物遺存体から見た馬の起源と普及」『日本馬具大観』1 古代上 日本中央競馬会 33-44頁

水原岩太郎1939『師楽式土器圖録』

光永真一編1995『津寺遺跡2－山陽自動車道建設に伴う発掘調査10－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 岡山県教育委員会

宮崎泰史2012「1 農・漁業生産 ⑤家畜と牧場」『古墳時代の考古学』5. 時代を支えた生産と技術 同成社 61-79頁

物部茂樹編2011『八紘古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告233 岡山県教育委員会

森 勇一1991「珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察」『考古学雑誌』第76巻第3号 日本考古学会 62-75頁

柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美1977『川入・上東－都市計画道路（富本町・三田線）に伴う埋蔵文化財発掘調査－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会

山磨康平・福田正継1980「琴海1号墳」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36 岡山県教育委員会 75-116頁

山本慶一1973「倉敷市児島仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 倉敷考古館 11-23頁

行田裕美・小郷利幸・木村祐子1991『小原遺跡－津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告8－』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第38集 津山市土地開発公社・津山市教育委員会

渡辺 誠1991「3. 松崎遺跡におけるブロック・サンプリングの調査報告」『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第20集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 67-76頁

渡辺 誠2012「茨城縄文に始まる日本の製塩」『特別展 霞ヶ浦と太平洋のめぐみ－塩づくり－』図録 茨城県立歴史館 i-X頁

図版出典

図1・4：田嶋作成。図2・3及び図6－9：田嶋実測。図5：亀田編1997・岡本1986を一部改変。図6（－9を除く）：寶藏1992を一部改変。図7：近藤編1999を一部改変。図8：下澤1988を一部改変。図9：間壁他1979・藤田1981・藤原他2003・武田1999・行田他1991を一部改変。図10：山磨他1980・物部編2011・岡本編1999を一部改変。表1・2：田嶋作成。

【現住所】〒703-8284 岡山市中区網浜834-1
岡山県埋蔵文化財センター

